



逃げる2月を追いかけよう

「1月は行く、2月は逃げる、3月は去る」と言われています。1月は正月があり、2月は28日と普通の月より短く、3月は年度末でやることが多いことから、日が早く過ぎるということを表しています。また、元々は農家で伝わる口承が数え唄の類で、農業シーズンは4月～12月のため、1月～3月はオフシーズンになりますが、うかうかしているとあっという間に終わってしまうという意味もあるようです。

昨日、3年生は公立高校の自己推進入試があり、本校からも56名が挑戦しました。面接では、学習や部活動だけでなく、ボランティア活動などについての質問もあり、普段から様々な経験しておくことの大切さを実感しました。来週には結果が発表になります。一足先に春を迎える人もいますが、再び厳しい冬と闘わなければならない人は、輝ける場所に向かっての全力疾走がまだまだ続きます。がんばってください。

1・2年生は、校内マラソン大会がありました。早くゴールした順位をつけると、右のようになっていますが、大切なのは過去の自分に比べて成長できたかどうかということです。本番で自己新記録を出す人が多く見られたことから、自分の限界に挑戦していたことがうかがえます。

新1年生（現小学校6年生）は、入学説明会がありました。真剣に話を聞く姿はとてもすばらしく、来年度が楽しみになりました。なお、その中で、平成23年度の予定についても少し触れましたので、主な行事について紹介しておきます。（今後、変更になることもあります。）

- ◆入学式：4月 7日(木) ◆修学旅行：5月11日(水)～14日(土)
- ◆体育祭：5月29日(日) ◆合唱コンクール：10月22日(土)
- ◆五色台集団宿泊学習：10月28日(金)～31日(月)

1年	＜男子＞	＜女子＞
1位	稲田 誠巳	石原 千春
2位	田尾 波暉	安藤はるな
3位	湊 健矢	大澤 萌香
4位	曾根 大輔	香川 美聡
5位	小川 竣矢	宮武 姫菜
6位	山下 憂記	大森 美波
7位	小出 凌大	高谷 茉衣
8位	関 真旺	立石 摩樹
9位	高嶋 来輝	渡辺 彩花
10位	徳重 海都	前川 七星

2年	＜男子＞	＜女子＞
1位	橋本 翔	吉田 珠歩
2位	貞廣 航大	白川 賀子
3位	安藤 昇	佐藤ほのか
4位	小野 一真	渡邊 尚子
5位	高橋 國光	安藤 朱音
6位	大下 亜門	小泉 遥香
7位	香川 長海	小久保友代
8位	大山 宏輔	小林 彩希
9位	真鍋 涼	金子 奈央
10位	前川 和也	香川 彩奈

連載

A教頭の「走ることのススメ」② ～駅伝にかける熱い想い～

前年の駅伝大会で区間賞に4秒と迫った私は、今年こそは区間賞を取るんだと、学校の行き帰りも走って通勤するようになっていた。ところが、平成2年12月14日。帰宅途中、暗闇の中で歩道の穴に気がつかず、それに足をとられて膝を打ってしまった。単なる打撲だと思ったが、レントゲンの結果、骨折という最悪の事態になってしまった。何か月も前から続けてきた練習が一瞬のうちにして……。目の前が真っ暗になった。ショックから立ち直るには時間がかかった。

しかし、そんな時に勇気づけてくれたのが生徒たちであった。夢を目指して頑張っている生徒たちを見て、いつまでもうつむいてはいけないと自分自身に言い聞かせた。

夢に向かって再びスタートしたのは4月。春、夏、秋と、季節はあっという間に時は過ぎていった。途中思うように記録が伸びず悩んだこともあったが、そんな悩みは、走れないくやしさに比べたらちっぽけなものだった。また、夜のグラウンドでの一人の練習もつらかったが、それもゴールインした瞬間を思い浮かべると我慢できた。そして、復活をかけた宣言タイムマラソンでは、2kmを7分8秒という予想を大幅に上回る記録が出て、自信にもなった。また、12月には校内マラソン大会にも出場した。3年生とのガチンコレースでは15位と大健闘をみせ、着実な仕上がりに具合に満足だった。

平成4年1月15日本番。再びアンカーを任されたレースは、走れる喜びのあまり前半とはしすぎてペースを乱してしまい、ラストスパートがきかなくなった。それでも、真っ白いゴールテープが見えた瞬間、思わず胸が熱くなり、最後の力を振りしぼることができた。また、ゴールの向こうでは、生徒たちが待っていてくれた。一人で始めた復活へのレースは、生徒たちの応援という華やかな舞台の中で幕を閉じることができた。タイムは区間賞にわずか1秒及ばなかったが、くやしさは全くなかった。それは、走れるということがすべてを喜びに変えてくれたからである。そして、その思いを歌『3才～笑顔と声援の中で～』にして生徒たちに伝えた。

走る……。この当たり前のことに感動を覚え、幸せを見つめることができた。そして、マラソンで最も必要な精神力も、骨折というハンディを乗り越えることによって身につけることができた。でも、これで終わりたくなかった。次なる夢に向かって、新たなスタートラインに立つことにした。（つづく）